

部分の与格構文にみる感覚動詞への意味拡張 -対格構文との対比を通して-

川上 夏林
(京都大学大学院)

ある作用が身体全体と部分に及ぶことを表す部分の与格構文について、先行研究の主な争点は構文の成立を左右する動詞の意味分析にあった。他動詞を基本とするとき、(1), (2)から、動詞の表す身体全体への影響の大きさが部分の与格構文の容認度を左右するように思われる。しかし、状態変化動詞 *bless* が表す身体全体への影響は大きいはずであるが、(3a)が示すように部分の与格構文を容認しない。つまり、動詞の表す影響の大きさは構文が成立するための十分条件ではないことを意味する。また、(3a)に反して、(4)が示すように、*bless* が部分の与格構文を容認する事例も存在する。まとめると、動詞の意味を中心にした分析ではこれらの現象を十分に説明することができない。

- (1) Paul lui a cassé le bras.
- (2) Paul lui aime bien les yeux.
- (3) a. *Il lui a blessé le pied. / b. Il l'a blessé au pied.
- (4) La lumière de la lampe de poche lui blessait les yeux.

以上の問題を切り口に、部分の与格構文と対格構文(3b)の対比によって、構文と動詞の相関関係を明らかにし、構文にみる動詞の意味拡張へ考察を広げる。次の順に考察を行う。

1. 認知的観点から、部分の与格構文と対格構文の事態認知を考察し、語彙概念構造によって各構文の意味を検討し、動詞の意味と構文選択がどのように関わるのかを示す。ここで(1), (3)が対照的な結果となる原因が明らかになる。

2. 他動性の低下に伴う動詞の事態認知の転換をもとに、(3b), (4)の構文交替について考察する。そして、(4), 以下(5)が感覚を表すことに注目し、部分の与格構文に現れる動詞が感覚動詞へと意味拡張を起こすことを構文の性質から示す。

- (5) La lumière lui brûlait les yeux.

3. 対格構文に現れる動詞は、(6), (7)にみるように、心理動詞へと意味拡張を起こし、これが多義性に関わる現象であることを示し、2.で検討する部分の与格構文にみられる感覚動詞とは意味変化の過程が異なることを示す。

- (6) Ses paroles ont blessé Marie.
- (7) La nouvelle de Marie m'a saisi.